

舎飼い酪農の問題と放牧酪農の意義

江見 智彦

キーワード：舎飼い酪農、放牧酪農、メガファーム、やま地酪農、多面的機能

1. 研究の背景と目的

日本の酪農は舎飼い酪農が中心であり、多頭飼育、集約化、専門分化を進め、飼料は海外から大量に輸入するという歪んだ構造を作り上げてきた。結果、環境問題が生じているが、経済効率最優先の価値観が転換されることはなく、今もなお自然から乖離した工業的な酪農が日本では主流になっている。そこで、本論文では、日本の舎飼い酪農にはどのような問題があり、放牧酪農に転換することにどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 論文の概要

第1章では、日本の舎飼い酪農は環境問題を生み出し、それらの環境問題を改善することができるのは放牧酪農であることを示した。

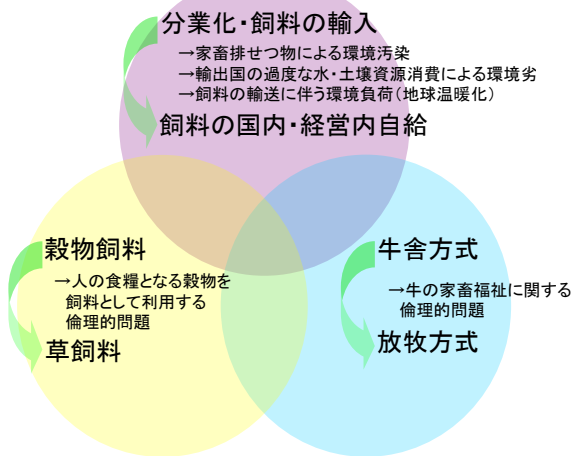


図-1 日本の酪農が生む環境問題の原因及び改善策

次いで第2章では、超大規模酪農経営のメガファームは、舎飼い酪農の性格をより強めたものであることから、環境問題の発生に大きく寄与することが予想されたため、現状と実態を農林水産省が行った調査の結果を中心に分析し、メガファ-

ームの環境影響性を検証した。その結果、都府県のメガファームは濃厚飼料のみならず、粗飼料まで経営外部に大きく依存している状態であり、ふん尿を還元する農地面積も十分に粗寝備えていないことが明らかになり、環境影響性が高いことが示唆された。

第3章では、日本における酪農の必要性を整理し、海外と日本の牛乳・乳製品の価値を比較した。その結果、日本の酪農の展開方向は、環境の価値と国内の存在意義という視点から、国内の放牧酪農が最も有効であることを明らかにした。

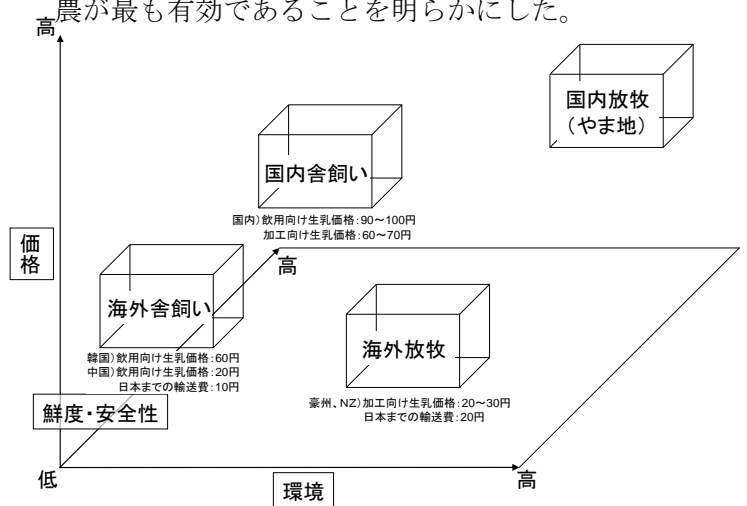


図-2 牛乳・乳製品の価値を環境、価格、鮮度・安全性で評価した時の各国酪農の位置関係

第4章では、舎飼い酪農から放牧酪農への転換の可能性を検討した。

第5章では、やま地酪農の環境保全性に関して、既存文献と現地調査を照合した結果、やま地酪農の中にも環境に及ぼす影響が高いものも存在することが明らかになった。したがって、やま地酪農が環境保全的な酪農形態であるためには、「環境保全型やま地酪農」なるものを定義し、飼養方法等に一定の基準を設定することや適切な保全対策を実践することが必要であると考えられる。